週刊読書人　2026年（令和8年）8月14日（8月7日合併）（金曜日）

中川　雄大著

「都市計画」の歴史社会学

戦間期東京が描く近代都市の理想と現実

四六判・468頁・4620円
青土社
978-4-7917-7791-4
TEL. 03-3294-7829

都市計画を社会にひらくこと

その未来像を社会とともに共有する

中島　伸

都市計画を社会にひらくことについて考える。

都市計画は私たち都市住民にとって、その基盤となるものをつくる計画であり、暮らしに密接に影響しているものの、普段生活している中でそのことを認識することは少ないだろう。現代では特段、都市計画を意識しなくとも生活ができるくらいに都市計画は進んだとも言える。しかし、都市計画は十分だろうか。評者は都市計画を研究し、また実際の現場に関わる立場から、都市計画を社会にひらくとはどういうことか考え続けてきた。

本書は、新進気鋭の都市社会学者による関東大震災を前後する時期における都市計画の実相に迫る学術書である。博士論文をもとにした本書は、400頁超の大著であり、都市計画をめぐって私たちが日常的にも使う「都市」、「都市計画」、「都市問題」、「場末」、「市民」、「復興」、「復旧」といった言葉がどのように理解、受容され、都市計画の現場で実現に向けて機能していったかを東京を事例として明らかにしている。本書の特徴は、「都市計画が何を計画したのか」ではなく、「都市計画がいかに社会に受け入れられたのか、または受け入れられようとしたのか」を描いた点にある。

これまで都市計画学は、工学分野の都市計画研究者が都市計画を社会に適用する技術として、いかに都市計画が実現できるかを研究してきた。それは本書でいうところの「都市計画当局」による都市計画のための学問である。その意味で工学分野の都市計画学は、計画を実現する技術を磨いてきたのである。一方、本書の著者の専門とする都市社会学は、これまで都市計画が扱いきれない市井の人々や都市での営為を描いてきた。しかし、本書は両者と異なる立場で書かれている。こうした従来の都市計画を対照化し、都市の本質に迫ろうとする都市社会学とは一線を画し、「都市計画そのもの」を研究対象として論じられているように感じた。

そして、本書を貫く問いは「都市計画はいかにして導入されたか」である。「どのように都市計画を実施するのか」と理解すれば、これはこれまでの工学分野の都市計画学の問いと同じであろう。しかし本書は、〈説得的コミュニケーション〉という観点から都市計画の必要性が社会の中でどのように言葉によって共有されようとしたのかを描いている。本書を読むと、都市計画とは工場などの立地を規制することや都市基盤を区画整理する技術である以上に、それを社会が必要だと理解する過程でもあったことが見えてくる。そこから、都市計画を社会にひらくとは、都市計画の必要性を社会と共有する営みなのだと気づかされた。

関東大震災前後の東京では、都市計画はその都度異なる相手との言葉の共有と説得を必要としていた。本所の工場問題では周辺に住む地域住民、郊外では新中間層、震災復興では議会や市民など、都市計画を必要とする主体は移り変わっていく。東京という一つの都市の中であっても都市計画はその時ごとに誰にとっての都市計画なのか、その説得相手を変えながら実現に向けて試みられてきたことがよくわかる。本書は、それぞれの事例を丹念に積み重ねることで、東京において都市計画がいかに社会に導入されていったのかを〈説得的コミュニケーション〉という観点から描き出すことに成功している。

都市計画は、物的環境としての都市空間を設計する技術であると同時に、人々が未来の都市像を共有し、社会実現を引き受ける実践なのだと本書を通じて理解することができる。では、その都市像とはどんなものか？という問いは、評者自身にとってもなお考え続けたい課題として残った。本書は忘れがちな都市計画の前提に立ち、都市計画が立ち上がる姿を歴史の中から丹念に描き出している。本書を読んでいるうちに現代において都市計画をひらくとは、都市計画の内容を説明することだけではなく、都市の未来像を言葉とともに社会と共有することなのだとその思いを強くした。（なかじま・しん＝東京都市大学准教授・都市計画）

★なかがわ・ゆうだい＝明治大学専任講師・都市研究。東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。一九九四年生。

学術思想